

青空

真継伸彦



青 空

真継伸彦

青
空

定価 一二〇〇円

昭和五十八年六月五日 印刷
昭和五十八年六月二十日 発行

著 者 真 継 伸 彦

編集人 川 合 多 喜 夫

発行人 関 根 望

発行所 毎日新聞社

●一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
●五三〇 大阪市北区堂島
●八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
●四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

青

空

装
幀
福
島
誠

前

篇

おれは自己自身を

救助しよう

—

長い巻紙に、二百余人の受験番号と姓名が列記してある合格発表の掲示のなかに、自分のものを認めたとき、彼の胸中には新しい不安がもたげた。

彼が入った大学では、入学宣誓式というものが行われることになってた。近所に住む医学部生の岡島さんが教えてくれたのだが、新入生は学部ごとに大教室にあつめられて、まず学部長から、在学中は学則を守りますとかいったような、ありきたりの内容の宣誓文を読みきかされる。そのあとで、一人ずつ前に進みでて、いかめしい署名簿に毛筆で署名させられるというのである。

不安はその毛筆にあつた。彼はどういうわけか小さい時から、緊張すれば手がアルコール中毒患者のように震えた。おかげで習字の通信簿はつねに「乙」であつたが、小学三年のころの彼の半紙には、しばらくの間、右下方にべったりと墨の跡が付きつづけたこともあつた。原因はいくら考えてもわ

からない。

「先生、何ほ書きなおしてもこないになりますのや」と、ペソをかきながら教卓へ持参すると、優しい田口先生は笑顔で受けとってくれた。長田君がいけずしとるのとちやうやろうか？ 彼は右どなりに坐る級友をうたがい、勉強ができないために威圧できる相手を、額に青筋をたてて責めたこともある。まったくの冤罪であつて、原因は、彼が毛筆の震えをふせぐため、右肘を机の上に付けることにあつた。その前に服の右手首が硯の上を滑走するので、墨が半紙の上に輸送されるという次第なのである。

文学部長という畏るべき大学者の前では、彼はつね以上に緊張して縮みあがり、毛筆は舞踏病患者のように震えつづけるにちがいがなかった。その結果、ぶざまきわる真津木信彦という署名が、由緒ある大学に永久に保存されることになるのである。それも屈辱だが、彼にはなおのこと、震える自分を見まもっているであろう文学部長の視線が、今から耐えがたいものに思われた。

おれは何時もこうなのだ。合格が嬉しくないはずはないのに、厭なことばかりが予想されて、憂鬱の底に押しひしげれるのだ。と、胸ふたぐ思いでかえりみながら人氣のない中庭を立ちさろうとすると、茶色い練瓦づくりの校舎の左方から、次兄の道郎が姿をあらわした。出がけにはおたがい何も言わなかったが、心配して後を追ってきたのである。

彼は左手をあげ、笑顔でうなずいた。道郎は白い歯をみせ

ながら近づいてくると、

「喫茶店でもいこか」

と言った。

文学部の校舎は、大学本部がある広い構内の中央北方にたたまっている。南どなりには、法・経の両学部が共有する大校舎がある。その間を西へむかうと、十字路の左前方に大きな付属図書館がある。道はその脇を下ってゆき、通用門を出れば、街路樹がならび市電が走っている東山通である。

二

二人は高い石垣にそう歩道を北上して、東山通が今出川通と交差する「百万遍」から市電に乗った。今出川通を西へむかい、賀茂川をわたると、河原町通を南下して京都駅へむかう路線である。ならんで吊皮にぶらさがると、彼の胸中には、それまで自分にたいしても隠していた、入学宣誓式の署名よりもさらに辛い予想がふくれあがってきた。

彼は緊張すれば五体だけではなく、声帯も舌も震えるドモリであった。ドモリ、瘡でき、小便たれ。道郎は幼いころに喧嘩をすると、この三位一体の罵言を彼に投げつけた。そのとおり、六人の兄弟妹のなかで、どういうわけか三男坊の彼だけが、どこか共通性がなくもないこの三種類の醜態を、人目にさらす運命にあった。

化膿症は生まれつきのものであった。壬生に住んでいた幼いころには、毎年のように足の裏に大きなぶよぶよの魚の目

ができて、医者に切ってもらっていた。嵯峨へ引越した小学四年の冬には、頭に突然黄色い噴火口が盛りあがった。黄色い溶液を流したす幾十という大きな噴火口が頭全体を覆って、彼は眠るさいには、布が貼りつかぬよう枕を硫酸紙でくるんだ。瘡はやがて両頬から唇をも征服した。眼がさめれば、上下の唇が真黒な瘡蓋の同盟軍で結ばれているのである。彼は震える手で中央部をもぎとり、わずかに開く口に粥を流しこんだ。

だれかれに指さされあざ笑われる毎日の登校が拷問であった。朝礼のさいにだけ、ささやかな救いがあった。一千六百人の全生徒が講堂に密集すると、彼は伸びあがって前方の下級生のほうを覗きみ、自分と同様、いがぐり頭が黄色い月面となっている相棒をさがした。みつければ、これで異物が自分だけではないことが、皆にわかつてもらえんと思つて安心した。

眠るやたちまち膀胱が緊張して縮みあがり、中味を破廉恥に流しだす癖も、壬生から嵯峨へ引越した、おなじ昭和十六年の冬からはじまった。化膿症は中学生になれば治つてくれたが、下方の漏出は情ないことに、敗戦をむかえた中学二年の夏までつづいた。敷蒲団には毎夜のように、劣悪な自分の内部をさらけだすような、あやしげな地図が描きだされるのである。毎朝のように、それをどう隠蔽するべきかとうろたえてみると、ドストエフスキイが『罪と罰』に克明に描きだす、犯罪者ラスコーリニコフの心理に共感する一助には

なった。

しかしその夜尿症も、敗戦と同時にむかえた思春期に入ると、治ってくれたのである。顔を覆っていた薄いあばたのような瘡の跡も消えてくれた。自分の体はなつ蒸れた枯草のような匂いを嗅いだり、変化してゆく肉体にしげしげと見入ったりする時の彼の喜びには、たぶん人なみ以上のもの、そう、白鳥に変身してゆくみにくいアヒルの子ほどのものがあった。

三

見る見るうちに背丈が伸びて遅おくしくなっていたその思春期に、彼はドモリもやがて治なつてくれるだろうと期待した。みにくいアヒルの子が、心身ともに白鳥に変身して青空を飛翔するのであると、彼は畠仕事にはげみながら、自分に言いかけた。家の裏庭と近くの竹藪の跡と、あわせて一反二畝ばかりある畠の手入れは、主に母が行っていた。母は貧乏百姓の娘で、野良仕事が好きであった。それを彼が、弱い自分の体を鍛えるために、積極的に手つだうようになっていた。以前はわれながら呆れるほどの怠け者であったのが、勉強にはげむようにもなっていた。しかし、そのようにして自立する大人になってゆこうとすれば、たぶんに精神の病いであるドモリだけは、かえって悪化していった。

母の話によれば、彼のドモリの発端は道郎の影響であった。自分では何もおぼえていないのだが、三歳年上の道郎

は、幼いころにおそろしいほどの早口であったという。性急にものを言おうとするあまりにドモるのを、彼も自然に真似てしまったというのである。

「ミッチャんは気がしつかりしとるさかいに、大きくなっていたら治ったんや。おまえはアカンタレやさかいに、ますますドモるようになってしもたんや」

と、母は情ない顔で分析したことがある。アカンタレは自認せざるをえないが、彼は自分のドモリの悪化の原因は、それだけではないと思っていた。

彼は小学三年の夏休みに、田口先生から吃音矯正学院へゆくよう薦められた。それに応じたことが、とりかえしのつかぬ失敗であったと今では思っている。休暇中のさる小学校の教室を借りて開かれた矯正学院には、彼以上のドモリが大勢あつまってきた。顔を顔面神経痛の患者のようにひきつらせて、なお最初の一言を無限に連発するばかりの子供も何人かいた。見てみると、ボクもこんな顔になってしまふのやろかという恐怖がおそった。恐怖がかえって、その対象へ惹きつけて模倣させていったのであると、彼は自分では分析している。彼はアホなことに、ドモリを悪化させるばかりの吃音矯正学院へ、中学二年の夏まで通いつづけていた。

ふだんは母とも兄弟妹とも級友とも、ごく流暢に話しあえるのである。あらたまった情況に入れば、とたんに舌も声帯ももつれるのである。自分が恐れているのは周囲のあらたまった視線であり、あるいは憎悪や嫌悪のこもる視線であるこ

とを、彼は中学三年の秋に行われた町内の運動会のさいに痛感していた。彼は自転車の遅乗り競走にでたのだが、その時に、間近で自分を注視する何人かの視線に気がつく、ふいに両の口元がわななきだした。そのように、露骨な視線にあえは顔面神経までがおののくのが、彼の情ないところであった。そして、あらたまつた視線を意識しただけでも、何故おびえなければならぬのか理由はわからず、舌や声帯が縮みあがるのである。

四

入学すればさつそく新入生の級分け（きぶわけ）が発表される、とは彼は吊皮にぶらさがりながら、胸ふたぐ思いでかえりみた。新しい級友が一室につどうて、当然ながら、自己紹介という儀式がはじまるのである。その時に、おれはきつと皆の注視に耐えかね、わななく口から一言も発せられなくなって、失笑を浴びるにきまつている。

それは入学宣誓式の署名どころではない、おそろしい予想であった。彼はさきほど合格掲示の前では、署名の失態のほうにばかり気をとられていた。それも、さらにおそろしい予想から気を逸らせるための、自分の心理の詐術であったと、彼は思いあたった。厭なことは意識したくないものであり、そのためには、より厭ではないことに意識を集中しておればよいからである。ところで、いったん厭なことを意識してしまえば、何かのはずみで忘れてしまうまで、意識しつづけて

いなければならぬのが、心理の地獄である。

おれは入学試験がおわつた直後から、宣誓式のことと自己紹介のこととも悩みつづけていた、と彼はかえりみた。それは、数学だけは仲間（な）に口外したくないほどの大失敗をやらかしたものの、総合点をどれほど低く見つても、合格最低点を案に越えていることがわかつていたからである。合格の自信がついたとたんに、ドモリの自信喪失が苦しめはじめたわけであるが、それでも発表を見る今日までは、合格にたいするいくぶんの不安があつて、それがドモリの不安を覆っていたわけである。ところが今からは、おれはドモリの不安に襲われつづけなければならない。

ゆがむ顔を皆に見られないためには、まっさきに教室に入つて、中央先頭の席に坐ればよい、と彼は作戦を立ててみた。順番がくれば、ちよつとだけ後をふりむいて、姓名と出身校だけを告げるのである。姓名を先に名乗るのが通例だが、彼には真津木の「ま」よりも、西都高校の「さ」のほうが出やすい。だから不自然に思われようと、出身校のほうを先にしようとは彼は考えた。そして、今からこれほど怯えて緊張しているようでは、彼は本番では、「サ、サ、サ、サ、サ、サ西都高校、マ、マ、マ、マ、マ……」とドモリにドモることとは、火を見るよりも明らかであると観念した。

どうしておまえはそんなことを、始終よくよ思い悩んでいるのだ？ と、彼はついに、常のように自分を罵つた。世の中にはドモリどころではない不幸な人間がいっぱいいるの

に、おまえはドモリ程度にこだわっていやがる。だいたいおまえがドモろうがドモるまいが、宇宙全体からみればまるでちっぽけな出来事ではないか。

彼は広大な宇宙を想い浮かべた。そのなかの小さな地球のなかの、小さな小さな日本のなかの、小さな小さな自分がドモって笑われている姿を想い、

「宇宙史の全体！」

と、彼はつい口にして言った。

「何やねん？」

と、となりに立つ道郎が聞きとがめ、彼は赤面した。

五

彼は膀胱だけではなく、心も洩れやすくできていた。つい口にする言葉のたいていは、自分にたいする罵言である。彼の居間は二階入口の六畳であって、奥の八畳には道郎が陣どっているのだが、彼は勉強の最中に、道郎がいることを忘れて、「アホ、バカ、カス、シネ、デキゾコナイ」と自分を罵り、

「たいそうに言うない」

とたしなめられたこともある。おれは実際、自分で自分をもてあましていたいような人間であるにちがいないと、彼は混んでいる車内を、だれかに聞かれなかったかと窺いみながらかえりみた。

二人は「三条河原町」で降りた。道郎は先に立って三条通

を南へ横断し、数軒先の二階にある「コルネット・ブルー」へ上っていった。彼が喫茶店に入るのは、生まれてはじめてのことである。心をとぎめかせて古びた木造の階段を上ってゆくと、道郎の馴染らしい「コルネット・ブルー」は、山小屋風で中二階があったが、ごく古ぼけた店であった。

開店直後のことで、先客はいなかった。二人は晴れわたった路上をみおろす窓ぎわに、向きあって席をとった。注文したコーヒーをウエイтрレスが運んでくると、道郎は、

「まずはおめでとう」

と、あらたまって言った。

「お、お、お、おたがいに」

と、彼は緊張して言った。

道郎はこの春に旧制大阪外語専門学校を卒業して、彼とおなじ大学の経済学部に入っていた。三歳年上であって、学年は早生まれの彼より二年上級である道郎が同時におなじ大学に入るようになったのは、占領軍が行った学制改革の結果である。旧制度は小学校だけが義務教育の六、五、三、三制であって、道郎はこちらをたどってきた。新制度は現在も行われている六、三、三、四制であって、彼は昭和二十三年の春に学制改革に会い、旧制中学五年生になるところが、新制高校二年生になった。当座は男子ばかりの右京高校生であったが、秋に男女共学が実施されて大規模な編成がえがあり、彼は西大路三条の近くにある西都高校生となって、女の子にもニキビができるという大発見をした。彼はそれまで

『小公女』といった小説のなかで、綺麗な女の子とばかり会っていた。妹は二人いるのだが、妹は妹であって、女の子ではない。

兄貴とあらたまつた挨拶をしたあとの、気づまりな沈黙のなかで、彼は自分と道郎との人生コースが逆転してしまつたと、ひそかにかえりみていた。というのは、道郎は文学部に入つて将来は小説を書き、彼は経済学部に入つて将来は尋常^{じゆんじやう}に就職し、無頼の生活をつづけるはずの道郎を資金援助するというのが、二人が中学時代にかわした、ごく真剣な約束であつたからである。ところが道郎は、若死した父にかわつて五人の弟妹を養つてくれている長兄^{ちやうぎやう}の徹郎に気がねして、経済学部に進むことにしたのであつた。

六

思えばおれは三つちがいのこの兄貴から、囲碁や麻雀から音楽や文学、それに性教育にいたるまで、あらゆる分野の薰陶を受けてきた。と彼は、高価なピースをくゆらせている道郎を窺^{うかが}ひながらかえりみた。囲碁はつれづれの時の相手を命じられて覚え、麻雀はメンバーが足りない時に加えられて覚えた。音楽は、道郎が友人から借りてくるレコードを一緒に聞いた。道郎がベートーベンの「ヴァイオリン協奏曲」の第一章全部を口笛で吹けば、彼も口をとがらせて合奏した。

道郎は旧制中学時代に、上桂にあるおなじ学校の二年上級

であつた。敗戦の翌年、五年生の時に、校内雑誌に恋愛小説を発表していた。道郎はそのころ、

「わしはほんまにスケベやねん。メッチェンとならんで歩いとつたら、ええ匂いがしてきてたまらんのや」

と、いくぶん照れながら仲間に話していたこともあつたが、ごく清純なその小説を読んだ時に彼は、ボクも書いてやろうと発奮した。

メッチェンのいない彼がガリ版刷りの学級新聞に発表したのは、ドストエーフスキイ「貧しき人びと」ばりの、暗澹きわまりない（と自分では思われる）貧乏物語であつた。文字どおりの処女作の出来栄えは、道郎のものと同くらべれば、ドモリと非ドモリの話しぶりがうまい相違があつた。

道郎は話し上手でもあつた。痔疾があつて、幾度か入院して手術を受けていたのだが、あるとき退院してくると、隣のベッドにいた痔瘻のおぼはんの話を仲間に披露したことがあつた。

「女が痔瘻になりますと、ユキキになるのでよいに困りますのや」と、そのおぼはんは言いよるのや」と、道郎は「ユキキ」の最初の「キ」を高めて言った。「こっちには「ユキキ」の意味がわからへん。ところがおぼはんは、何度聞いかえても、「ユキキはユキキどすがな」と、困った顔で言いよるのやな。わしは五度ほど問いかえして、ようやく意味がわかつた」

道郎はそれ以上の説明をしなかつた。彼は数カ月あとでよ

うやく、「ユキキ」が「往来」であつたことに想到し、思わず笑いだしたのであるが、そのとき同時に、こういう類の話は、道郎のように澄まし顔で話してこそ、おもむきがあることに思ひあつた。

芸とは学ぶものではなく、盗むものである。思えばおれはこの兄貴からさまざまな芸を盗みとり、ついには創作志望の夢まで盗んでしまつたのではないのか。と彼は、道郎を窺いみながらかえりみた。道郎が何を動機として創作を志したのか、専門学校時代は一作も書かなかつたが、今もひそかに志を抱きつづけているのか、彼にはわからない。彼のほうも創作への志を、親しい兄貴にすらうち明けたことはない。彼はしかし、男女共学になつた高校二年のころに、実作と研究を併行させて生きることを、すでに決めていた。

七

西都高校に、藤野という英語の先生がいた。魯迅の「藤野先生」とはことなり、格別の印象をあたえなかつたが、三期のある日の授業のはじめに、黒板に英作文の問題として、「僕はよくセーヌ街などの小さな店先を通りすぎる。古道具屋、古本屋、銅版画屋などの店が、窓いっぱい品物を並べている。誰もはいってゆく人はいない。ちょっと見ると、商売などしていそうに見えぬくらいだ。しかし店のなかを覗きこむと、だれか人がいて、知らん顔ですわつたまま本を読んでいる。明日の心配もなければ、成功にあせる心もない。犬が

機嫌よきそうにそばに寝ている。でなければ、猫が店の静かさをいっそう静かにしている。猫が本棚にくっついて歩く。猫は尻尾の先で、本の背から著者の名前を拭き消しているかもしれない。

こういう生活もあるのだ。僕はあの店を買い取りたい。犬を一匹つれて、ああいう店先で二十年ほど暮らしたい」

と、こちらの藤野先生は書いたのであつた。

「リルケの『マルテの手記』という小説の一節や。訳せるだけでええから訳してみなさい」

と藤野先生は照れたような顔で、コンクリートの塀がすぐ近くにせまっている窓の外を見ながら言つた。自分は着席すると、教卓に『マルテの手記』の英訳本を立てて黙読をはじめた。

彼はリルケというドイツの詩人の、名前だけは知つていた。道郎が『神について』という小冊子をもつていて、彼も覗きみたことがあるからである。難解な『神について』は途中で投げだしたが、黒板に書かれた文章は、胸の奥に浸みいつて静かな波紋をひろげていつた。

なかでも彼を惹きつけたのは、「二十年」の一語である。彼はまだ十七年しか生きていない。二十歳の自分は想像もつかぬ大人である。ところがマルテという男は、二十年もの長い歳月を、市井の隠者となつて暮らしたいと希っている。その心境に、眠れば極彩色の悪夢を見つづけている彼の疲労が共鳴した。

藤野先生は何でこんな問題を出したんやろ？ と彼は、色艶のわるい丸顔に平凡な黒縁の眼鏡をかけた、禿げあがった額に疲労がにじんでいるような中年男を窺いみながら顧みた。なみの高校生に訳せるはずもない文章を示したのは、自分の愛読書を生徒たちに読ませようとする心遣いである。無口で陰気な藤野先生は、どんな疲労に耐えているのだろう？

彼はさっそく『マルテの手記』を読みたくなった。近寄りがたい藤野先生に借用は頼めず、古本屋を探すつもりであったが、と、思いがけず、家のすぐ近くの「嵐山堂」に、昭和十四年に刊行された大川清一訳の『マルテの手記』があった。となりに同じ清流社からでている、カフカという未知の作家の『審判』が並んでいた。『マルテの手記』の売値は百円、彼が徹郎から毎月もらう小遣いの四分の一であり、やや薄い『審判』は七十円であった。

八

『マルテの手記』には「九月十一日トゥリエ街にて」という添え書きがあつて、

「人々は生きるためにこの都会へ集まってくるらしい。僕はむしろ、ここではみんなが死んでゆくとしか思えないのだ」という、彼が惹きつけられざるをえない文章ではじまっていた。以下には主人公がバリで見聞したり、思い出によみがえらせたりする死の描写と考察とが、際限もなく書きつらねてあった。死の描写とは死にいたる病いや廃疾の描写でもあ

って、彼がこの小説ではじめて知った舞踏病という奇怪な病氣も、持主の老人が街頭で発作を起こしてはげしく踊りだすさまが克明に描かれていた。その克明さは、当の老人が背後の入念な視線に気がつけば、それだけで居たたまれなくなつて、発作を起こすにちがいないと思われるほどのものであった。

彼は禅宗に「己事究明」という言葉があることを教わっていた。それをもじって言えは、「死事究明」が主人公ないしは作者の意志であつた。主人公がどうして、これほど死や病氣や廃疾にこだわるかと言えは、それは作者自身に、死ぬことがたとえようもなく恐ろしいからである。マルテがどうしてこれほど克明な観察をつづけるかと言えは、それは著者のリルケ自身が、他人の視線を恐れつづけているからである。

そのことは、おなじく自分の死をたとえようもなく恐れている、同時に視線恐怖症でもある彼には、肌で察しられた。死が恐ろしいからこそ勇敢に見入ろうとし、他人の視線が恐ろしいから、恐怖を克服するために、自分自身が強靱な視線になろうとしているのである。こういう作者の勇気を直観した時に彼は、自分もまた自己自身の救済のために、こういう小説を書かなければならないと思ひあつた。

訳者の大川清一は巻末に長い解説を書いているほか、『リルケ雑記』という薄い新刊書を出版していた。それらを読むと、リルケは『マルテの手記』を書いた動機を、

「生の要素が我々にはつかみがないものばかりであるのに、

どうすれば生きることが出来るだろう？ 我々は愛においてつねに不十分であり、決意はあやふやで、死にたいしては無力である。だとすれば、どうして生きることが出来るだろう？」

という問いの解明にあつたと語っていた。あらゆる方法でもって、くりかえし最初から、この問いだけが問いつつけられていたのであつて、あらゆる証明はこの問いが実在していること、すなわち、人生そのものが我々にこの問いを突きつけていることの証明であると、リルケはさる女性の読者にあつた手紙で語っていた。

そのとおり、愛においてつねに不十分であり、決意はあやふやであり、死にたいしては無力であるというのは、まさにおれのことではないかと、彼は読んだ時に痛感した。他人に秘め隠している自分の正体が、詩人らしく簡潔に、この三項でもって決りだされていると、彼は思いあつた。

九

「愛においてつねに不十分であり」

彼がこの指摘から連想するのは、瘦せた背中を寒そうにかがめ、両手を半ズボンのポケットにつっこみ、うつむく顔を恐怖にこわばらせて歩いている一匹のガキである。身をちぢかめて守っているのは、ドモリ、瘡でき、小便たれの三位一體という、守るに価しないおれのである。ガキはそして、さげない上眼づかいで、だれが醜い自分を斥け、だれがなお

愛してくれるかという一事を見張っている。

彼は児童もので読んだ良寛さんを、幼いころに自分と同様、他人を上眼づかいに見ていたという一事において愛していた。良寛さんは、「おまえはもうすぐにヒラメになる」とたしなめられると、泣きながら海辺にでて変身の瞬間を待っていたというのだが、事実は彼と同様、他人の自分にたいする好悪の情にのみ敏感であつて、自分はだれかに嫌われ憎まれているのではないかと、始終眼をキョロつかせて窺ひ、ひとたび愛のまなざしに出会えば、擦りよつて狎れしたしみ、萎縮した心の髪を伸ばそうとするばかりの求愛小僧であつたにちがいないと、彼は確信していた。

「貴様らッ！ それでもキンタマがぶらさがつとるのかッ！」

天橋立で軍事訓練を受けたさいに聞いた、舞鶴海兵団所属の下士官の叱咤が耳によみがえる。中学二年の春に、五十人ほどの志願者が三週間の訓練を受けることになり、彼も名にしおう帝国海軍のしごきを受けようとして参加したのであつた。到着した夜に、修学旅行のようにはしゃぎまわる生徒らを、下士官は旅館の前の路上にならばせて叱りとばしたのである。

「男ちゅうもんはキンタマがぶらさがつとつて重心が下にあら。飛びくる砲弾の下にあつても、開いた股の間にだらッとおぶらさげて、落ちつきはらつておるのが男ちゅうもんじや。女は乳がふくらんでおつて重心が上にある。そやから何

時もそわそわ浮き浮きしておつて、男に寄りかからんと生きてゆけんのじゃ。べちゃくちや囁きまわつておる貴様らは、變成男子ちゆうて、形だけが男の、性根は女の腐つたみたいな奴等じゃ」

なるほど女は妊娠して重心が下がれば、はじめて落ちついてくる生きものか。と思ひあたつたのは何年か後であるが、このときに聞いた變成男子という言葉も、何時までも心にのこつた。

軍事訓練は何よりも空腹がこたえた。連日のカッター訓練のさいに、彼はオールを波の上にすべらせては、「三番、貴様は何回ブレーキをかけるんじゃ」と叱られた。しかし夜に持参した毛布にくるまると、彼ははじめて男の匂いを嗅いだ。それは壬生に住んでいたところに、いちど我家に分宿した兵隊さんの群れから嗅いだのと同様の、皮革に汗の染みこむ匂いであつた。外面はその兵隊と同様に男になつてゆくのだが、内に秘められた自分の心は、何時までも、女の腐つたやうなガキのままであることを、彼は知っていた。

十

心のガキは愛に飢え、体のガキは喰いものに飢えてそだつた。昭和十九年の正月に父が数え年五十歳で死に、同時に徹郎が出征してிரை、無収人となつた彼の家庭も、かなりの飢えに耐えなければならなかつた。父はちよつとした材木商で、蓄えはあつたのだが、母がインフレーションと世間の眼

におびえて、ヤミ食料品の購入をひかえたからである。敗戦前後のヤミ食料品の値あがりはことにすさまじく、かつぎ屋が運んでくる米一升の値段が百円前後もした。中学教員の月給と同額である。彼がよく本を借りにいった保藤先生は、栄養失調で倒れた老母のために、月給をはたいて一升の白米を買い、粥にして喰べさせたことがあつた。

配給制度は有名無実で、遅配と欠配がつづいた。主食の名目で配給されるものが、高粱や豆粕から、ザラメという粗製の砂糖にまで転落した。母は惜しみながら買うヤミ米に、干芋や干大根どころか、何の味もない芋づるや、べとつくばかりの芋の葉を混ぜて炊いた。小麦を買うと石臼で粉にして、消化のわるい穀のほうも蒸しパンにした。

タブロイド判表裏二ページだけの新聞には、配給制度をまもつて一度たりともヤミ食料品を買わず、ついに餓死した某隠の後裔山口判事をはじめ、飢餓生活の惨状が毎日のように載つた。読むまでもなく、小学校の同級生の、俳句がすばらしく上手であつた藤原和義君が、失業中の鰥夫の父と弟もろとも餓死していった。体育の時間に腕があらない仲間は何人もいた。

母は五人の子供のために、自分の喰いしろを切りつめている。彼も平等に耐えなければならぬのだが、ガキの胃袋も心も、この平等思想を受けつかなかつた。ガキは母が簞笥の引き出しの奥に隠している財布がふくらんでいる時期を見はからつては、何枚かの十円紙幣を抜きとり、主に堀川のヤミ